

1

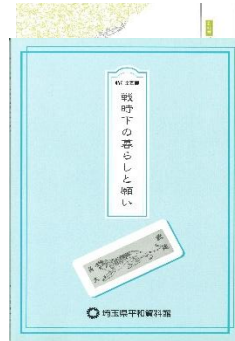


■学舎(まなびや)の子どもたち(平成6年度 特別企画展 展示図録) A4版 63ページ ■500円

今回の特別企画展は、主として戦中の学校の様子と、子どもたちの生活を紹介し、戦争の悲惨さと平和の尊さを改めて考えていただくとするものです。

戦時下における庶民の生活は多くの制約を受け、子どもたちも銃後を守る一員として犠牲を強いられました。これまでの小学校令は、国民学校令に改められ、皇国民の錬成を目的とした教育制度となりました。非常時の名のもとに戦意高揚思想の啓蒙により、子どもたちを満蒙開拓青少年義勇軍や志願兵などとして送り出し、労働力の不足を補うため、教育の一環としての勤労奉仕や勤労働員に従事させました。また、空襲の激化とともに親元から離して地方へ学童集団疎開をさせるなど、子どもたちにも多くの苦難を強いました。(図録内 序文より抜粋)

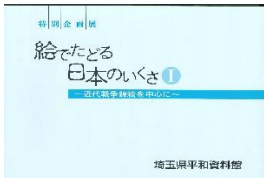
3



■戦時下の暮らしと願い(平成11年度 特別企画展 展示図録)A4版 44ページ ■400円

戦時中、戦場に赴く兵士たちに、家族や知人などは武運長久の様々な祈りをささげました。本展では千人針・出征幟・御守や寺社に奉納された絵馬、軍人人形等の資料を展示いたします。戦時下の暮らしと人びとの素朴な心情をうかがうとともに、平和の尊さを学ぶ機会としていただければ幸いです。(図録内 序文より抜粋)

4 ■絵でたどる日本のいくさⅠ ～近代戦争錦絵を中心に～（平成12年度 特別企画展 展示図録）A5版 53ページ ■400円



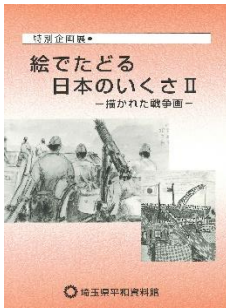
平和を語るには、過去に行われた戦争について学び、考える必要があります。本展では、西南の役・日清戦争・日露戦争を題材とした錦絵や当時の新聞などの資料を展示いたします。視覚的に明治時代の戦争の実情を理解していただき、平和の尊さを学び、考える機会としていただければ幸いです。(図録内 序文より抜粋)

5 ■絵本・雑誌に見る昭和の世相（平成12年度 企画展 展示図録）A4版 47ページ ■500円



「昭和」という時代は不況で幕明けし、昭和6(1931)年の満州事変から、昭和20(1945)年8月15日の終戦まで、およそ15年間に及ぶ戦争の時代をくぐりぬけ、戦後の混乱、そして復興・経済発展へと続く激動の時代でした。絵本・雑誌は、子供や青少年向け・一般大衆向けを問わず、付録を含めて、その当時の世相をありのままに反映しています。(中略) 本展では、特に満州事変頃から終戦とその後の混乱期までに焦点を当て、戦争が出版活動に与えた影響を絵本・雑誌を中心に、関連する資料も併せて御紹介いたします。(図録内 序文より抜粋)

6 ■絵でたどる日本のいくさⅡ -描かれた戦争画-（平成13年度 特別企画展 展示図録）A4版 47ページ ■500円



昭和12年(1937)年に日中戦争が起こり、以降、陸・海軍は、戦争の様子を画家たちに積極的に描かせていました。当時、それらの絵は全国で巡回展示され、国民の戦時意識の形成に大きな影響を与えました。こうした中で描かれた画家たちの絵は、戦争という極限状態での活動を伝える貴重な資料でもあります。 今回の特別企画展は、戦時中、画家の描いた戦争画や平和資料館が収蔵している子どものクレヨン画、兵士のスケッチ等をとおして、戦争の悲惨さと平和の尊さを考えていただく機会とするものです。(図録内 序文より抜粋)

7 ■女性たちの戦中・戦後（平成15年度 開館10周年記念企画展 展示図録）A4版 43ページ ■完売



戦争は徴兵された兵士のみならず、国民にさまざまな影響を与えました。特に戦時下の女性たちは、我が子や夫とは離ればなれの生活を余儀なくされただけでなく、労働力の不足を補うために、「銃後の戦士」として軍需工場をはじめ、さまざまな分野の仕事にかり出され、銃後の守りを担っていきました。 戦後も社会と経済の混乱は続き、人々は深刻な食糧難と生活難に苦しみました。そのような中、GHQによる改革が進められ、婦人参政権の実現、男女平等を規定した新憲法の成立をはじめとする民主化政策によって女性の権利は拡大し、女性の地位の向上や社会への進出はめざましくなりました。 今回の企画展では、戦争と女性との係わりに焦点を当て、戦中・戦後の生活の様子を伝える資料や写真などの展示をとおして、女性たちが母や妻、そしてさまざまな立場から、戦争の時代をどのように生きていったかを明らかにしております。(図録内 序文より抜粋)

8



■戦時の装い そのとき日本人は何を着ていたか (平成18年度テーマ展Ⅱ 展示図録)A4版 33ページ ■200円

今日、戦時下と言えば「国民服ともんぺ」というイメージが定着しており、学校教育でも、そうした戦時統制の側面が強調される傾向があります。しかし、当時の写真や資料からは、戦時統制にもゆるがない歴史的な服飾文化の伝統やファッション志向があったことがうかがえます。庶民は生活の知恵を絞って、ささやかながらもさまざまなお洒落を楽しんでいたのです。

そうした伝統と文化を支えた人々のエネルギーは、戦後の復興の原動力となり、現代日本の服飾文化の下地をなしていると考えられます。本書を通じて、力強い日本の文化の底流に触れ、他国や地域の伝統・文化に思いを寄せ、平和な社会を築ききっかけとしていただければ幸いです。(序文より抜粋)

9



■戦時救護 -日赤看護婦たちの軌跡- (平成19年度テーマ展Ⅱ 展示図録) A4版 47ページ ■800円

戦時体制における女性の役割は、内地で銃後を守ることにあったと受け止められることも多いようです。しかし、野戦病院や病院船においては、自らの生死をかけて傷病兵救護に奔走する日本赤十字社や陸海軍の看護婦たちの姿がありました。

たとえば、1937(昭和12)年の日中戦争勃発から1945(昭和20)年の第二次世界大戦の終戦に至るまでに、日本赤十字社が派遣した戦時救護班は、埼玉県支部関係だけでも27班676人を数えました。

本展では、戦時中に人道・博愛の精神のもと、献身的な救護活動を行った日本赤十字社の看護婦(女性看護師)を取り上げ、その苦難の道をたどってみました。その中で、実際に救護活動にたずさわった方々の貴重な体験もお寄せいただきました。(図録内序文より抜粋)

10

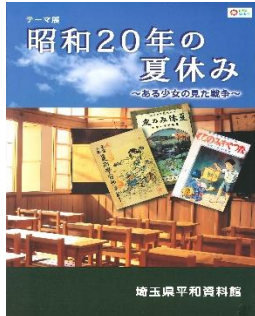


■戦時中の手紙に見る家族の姿 (平成21年度テーマ展 展示図録) A4版 33ページ ■700円

昭和6年の満州事変から日中戦争そして太平洋戦争と日本は長い戦争の時代を迎えます。その間、満州への移民、出征、疎開など戦争により多くの家族がいやおうなく離ればなれになりました。遠く離れた家族とのほぼ唯一の通信手段が手紙でした。そして手紙に書かれた肉親の消息は、少なくともそれを書いたときまでは生存していたという証明書でもあったのです。

今回の展示では、当館に収蔵されている当時の手紙を中心に、切り離された家族の姿と肉親への想いを取り上げます。展示で取り上げた手紙はどれも、戦争という厳しい時代を感じさせるものばかりです。自分たちの意志だけでは会うことも、素直な気持ちを伝えることもできない状況の中で書かれた文面には胸を打たれます。(図録内 序文より抜粋)

11



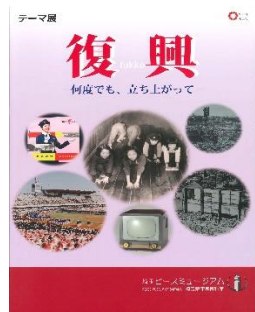
■昭和20年の夏休み ~ある少女の見た戦争~ (平成24年度テーマ展 展示図録) A4版 45ページ ■700円

今回のテーマ展は、昭和20年の夏を舞台に、国民学校に通うある架空の少女の視点を通して、子どもたちにとっての戦争の実像を描こうと試みています。

今から67年前の夏、日本は絶望的な戦争の中にありました。戦争は戦場だけで行われたものではありません。銃後を守り、支援を続ける多くの人々の存在が必要でした。国家総動員体制のもと、子どもたちも銃後の国民の一員として、様々な形で戦争を支えていました。戦争の末期になると戦火の中で、そして戦後もしばらくの間は、飢餓で命を落とす子どもも多くなりました。

長い戦争の中であって。当時の子どもたちは生まれた時から戦争状態が普通の生活であり、「戦争しか知らない子どもたち」だったのです。戦争という過酷な現実は、子どもたちの瞳にどのように映っていたのでしょうか。そしてそれをどのように受け止め、生き延びてきたのでしょうか。戦争の時代を生きた子どもたちの姿を通じて、実際に戦争を体験された世代の方たち、戦争を知らない大人たち、そして子どもたちが、戦争と平和について改めて考える場となることを願ってやみません。(図録内 序文より抜粋)

12

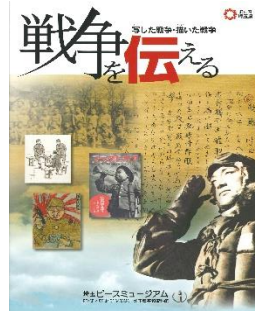


■復興 -何度でも、立ち上がって- (平成25年テーマ展 展示図録) A4版 46ページ ■1,050円

我が国では有史以来、幾度も噴火や地震、津波、水害などの大きな自然災害に見舞われてきました。(中略)

科学的な記録が残されている近代以降の災害で、埼玉にも大きな被害をもたらしたものは、明治43年の水害、関東大震災、カスリン台風などがあります。いずれも被害は広範囲に及び、多くの人々が被災しています。戦時下においては、空襲により日本の主要都市の多くが焼け野原となりました。埼玉でも県南部の都市部や軍需工場などが集中的に攻撃を受けたほか、終戦前夜の熊谷空襲では市街地のほとんどが灰燼に帰しています。壊滅的な打撃を受け、多くのものを失いながらも、私たちは廃墟から、絶望から、いつも立ち上がってきました。今回のテーマ展では、戦災からの復興を中心に、過去の自然災害やそれからの復興などを併せて取り上げ、何度でも力強く立ち上がってきた人々の姿を紹介します。(図録内 序文より抜粋)

13



■戦争を伝える 写した戦争・描いた戦争 (平成26年テーマ展 展示図録) A4版 31ページ ■900円

明治時代以降、政府や軍などの公的機関、新聞社や出版社などの報道機関は、戦場にカメラマンや記者をはじめ、当代随一の画家を派遣し、戦争報道にしのぎを削りました。戦争のイメージを喚起させる写真や絵画は、広報宣伝用として次第に大きな役割を担っていきました。

一方、戦場の様子や個人の感情を自由に表現する事が制限されていた時代、兵士は手記に、人々は日記に、戦闘の実態や日々の生活、自らの想いや感情を書き記しました。

本展示では、報道写真が伝えた戦場、街で写された出征の様子や軍隊生活を描いた絵画、綴られた日記などを通し、戦時下を生きた人々の姿を紹介するとともに、その心情に迫ります。(図録内 序文より抜粋)

14



■戦後70年 祈り -受け継ぐ思い- (平成27年度テーマ展 展示図録) A4版 32ページ ■800円

戦時中、肉親を戦地に送り出す人々は、あらゆる方法で出征兵士の武運長久を祈りました。個人の悲しみやありのままの心情を率直に表現することが憚られた時代、お国のために戦死することを潔しと言いつつも、心の奥底では無事に家族の元に帰って来ることを願い、祈り続けていたのです。  
今回の展示では、無事の帰還を祈った千人針やお守り、戦時下の日常を写した写真、戦後造立された平和祈念像などを通し、人々が祈りに込めた思いについて探ります。(図録内 序文より抜粋)

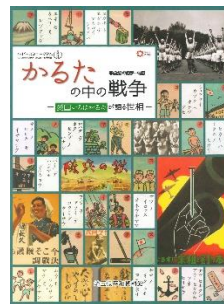
15



■戦時下の子どもたち (平成28年度テーマ展 展示図録) A4版 ■700円

昭和初期、日本は戦時体制に入りました。(中略)第二次世界大戦が始まると、食料を始めとするあらゆる物資が欠乏するようになり、生活は激変しました。さらにアメリカ軍による空襲で、多くの人々が死の恐怖と隣り合わせの毎日を送ることになったのです。  
その頃、誕生した子供たちは、学齢期を戦争のさなかに過ごすこととなりました。「欲しがりません 勝つまでは」という言葉は、当時の子供たちが息苦しい生活に追い込まれた状況を象徴するものです。  
このテーマ展では、残された当時の資料から、幼い子供たちの生活の中にまで戦争が忍び寄り、心の中にしみこんでいく恐ろしさを紹介します。本展が平和の尊さを見つめ直す機会となれば幸いです。(序文より抜粋)

16



■かるたの中の戦争 -愛国いろはかるたが語る世相- (平成29年度テーマ展 展示図録) A4版 ■700円

愛国いろはかるたは、1943年(昭和18)、小学生に愛国心を養わせるため、社団法人日本少国民文化協会が、情報局・大政翼賛会・文部省の後援を受けて句を公募・選定し、財団法人日本玩具統制協会が印刷・発行しました。  
「いろは」47句による読み札と絵札からなり、箱入り漢字表記の製品と箱入り片仮名表記の製品、一枚紙を切り離して使う片仮名表記の製品の3つが売り出されました。  
1943年は、日本軍の攻勢から連合国軍の反転攻勢へと、太平洋戦争の戦局が転換した時期に当たります。国内では国民統制策が一層強化されていきました。愛国いろはかるたの句を当時の生活物資とあわせて読むことで、戦時下の生活の状況を振り返り、戦争の教訓と平和な社会の大切さを改めて考えます。(序文より抜粋)

17



■童謡 その心 ～子どもたちの謡い～（平成30年度テーマ展 展示図録）A4版 43ページ ■700円

現在でも人々の間で広く親しまれている童謡は、大正時代に興った童謡運動（児童文化運動）の中で生まれてきました。その中心となったのは、『赤い鳥』『金の船（金の星）』などといった児童雑誌です。（中略）昭和期になり不況と共に戦時色が強まると、多くの雑誌が休刊となり、戦意高揚に関わる歌に変わりますが、終戦後は、戦時色を廃した歌に作り替えられ、また新たな童謡も創作され、現在でも人々に愛されています。本展では、童謡が誕生した経緯、戦局の転換に伴い変化していった童謡を通じて、戦争の悲惨さと平和の尊さを感じていただくものです。また、埼玉県に関わる童謡や童謡作家・作曲家などを紹介することで、童謡が社会の中で果たしてきた意義や郷土埼玉との関わりについて考える機会をもつていただこうとするものです。（図録内 序文より抜粋）

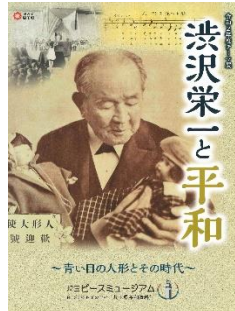
18



■描かれた戦争 -絵に託した思い-（令和元年度テーマ展 展示図録）A4版 41ページ ■700円

今回の展示では、兵士とともに戦場に赴いた従軍画家が描いた戦争画、兵士が厳しい環境の中で書き、故郷に送ったはがきや戦場で付けた日記と挿絵などから、戦場の緊迫した状況を知ることができます。また、戦意高揚と軍の宣伝のために描かれたポスター・雑誌、子供たちが疎開生活や日常の中で描いたクレヨン画、教科書の挿絵・絵本・紙芝居などから戦時下の社会での人々の苦労を垣間見ることができます。（図録内 序文より抜粋）

19



■渋沢栄一と平和 A4版 ■700円

渋沢栄一は、「近代日本経済の父」と呼ばれるように数々の会社を設立し、経済活動に携わった一方で、教育や福祉、国際親善、民間外交に積極的に取り組みました。中でも日米関係が極度に緊張していた昭和2（1927）年には、アメリカのグーリック博士が計画した親善人形計画に賛同し、日本国際児童親善会の会長となりました。アメリカの子どもたちから、全国の小学校・幼稚園に約1万3千体の親善大使「青い目の人形」が贈られました。（中略）栄一は、第一次世界大戦終結記念日である昭和6（1931）年11月11日「平和の日」に永眠しましたが、同年9月には満州事変が勃発し、その後、国際連盟脱退、日中戦争、太平洋戦争と悲惨な戦争の時代に突入します。全国各地で星条旗とともに大歓迎された青い目の人形は、わずか十数年で敵扱いされる時代となっていきます。今回のテーマ展では、昭和初期の日米の人形交流を中心に、その後の戦争の時代もあわせてご紹介いたします。（序文より抜粋）

20



■埼玉再建！ -埼玉県広報誌『埼玉メガホン』と復興の時代-（令和3年度テーマ展 展示図録）A4版 43ページ ■900円

『埼玉メガホン』は、戦後間もない昭和23(1948)年に埼玉県が創刊した壁新聞(広報誌)で、後の『県民だより』の、そして現在の『彩の国だより』の前身にあたります。  
 占領下の日本ではGHQが主導する民主化政策の一環として、官公庁による広報が重要視されており、紙媒体のほか、ラジオや映画、街頭広告、広報車など、当時のあらゆるメディアを駆使した広報活動が展開されました。敗戦によって日本は政治や社会の枠組み、秩序などを根底から変えることを余儀なくされますが、広報は新しい時代の到来を高らかに宣言し、その牽引役となっていきます。  
 今回の展示は、『埼玉メガホン』を中心に、埼玉県をはじめ、戦後の日本が直面していた様々な困難と課題、そして焦土からの「埼玉再建」に挑んだ人々の軌跡を、当時の時代背景とともに紹介しようとするものです。(図録内 序文より抜粋)

21



■青い目の人形双六 ■200円

昭和2(1927)年に、日本へやって来た日米親善大使「青い目の人形」と、その返礼としてアメリカに贈られた「答礼人形」を配した双六。埼玉ゆかりの人形を紹介しています。



22



■山碧く里うるわし唱歌の世界(DVD) ■900円

展示解説と、地元東松山市のコーラスグループ(せせらぎハーモニー・東松山少年少女合唱隊)による「早春賦」・「春の小川」・「故郷」など全23曲の唱歌の演奏・合唱を収録したDVD。